

## 『医方類聚』に引用された『傷寒論』は 北宋小字版だった

真柳 誠

茨城大学

『傷寒論』は北宋政府が1065年に大字本を初校刊、1088年には小字本も校刊したが、これら北宋版は現存しない。ただし『翻刻宋板傷寒論』（翻宋本）が明・趙開美の『仲景全書』（1599）に収録される。翻宋本は前付の牒文から1088年版の小字本系統とわかり、南宋および趙開美の付加が混入することは2015年の本総会で報告した。

一方、朝鮮医書を代表する『医方類聚』266巻は漢字圏において最大巻数の医学全書。世宗の命により文官と医官が1443年より編纂を開始し、1445年に365巻の稿が成った。1459年からは底本の俗字・異体字まで忠実に踏襲する厳格な校正がなされ、1464年に撰集が完成した。しかし歴大かつ錯誤の許されない書ゆえ、1477年にやっと全266巻の活字版30組が進上された。これが李氏朝鮮時代ただ一回の出版で、宮内庁書陵部に1組250巻252冊、その欠落部に相当する2冊がソウル郊外の韓独医薬博物館に現存する。

本書は中国医書の引用文を類編する。153種以上の引用書は成立が唐・宋・元・明初にまたがり、うち40種ほどはすでに現存しない。現存書でも、本書の所引底本は佚伝した古版本の場合が多々ある。それゆえ散佚書の復原、古医籍の校勘に有用で、幕末の考証学者は本書を存分に利用・研究した。本書は原本以外に、幕医・喜多村直寛（1804-76）の木活字版（1861）、韓国・東洋医科大学の直寛本模写影印版（1965）、台湾の韓国本縮印版（1979）、北京・人民衛生出版社の直寛本活字版（1981、2006重校再版）、北京・九州出版社の直寛本影印版（2002）の各版がある。しかし韓国模写本と北京活字本は誤字・脱文・書式などの問題があるため、本検討では宮内庁の朝鮮版原本を使用した。

三木栄は本書に『傷寒論』の引用（類聚本）があるのを報告したが、その詳細は未検討だった。そこで調査すると、本書巻28・42-45は、『傷寒論注解』（1144序、金版ないし元版）から、経文と成無己注文のほぼ全文を引用（注解本）していた。さらに成無己が省略した細字双行の北宋「割注」を「洪〔傷寒論註曰一作浮〕」のごとく、注解本の経文中に割注で補記。また注解本にない薬方・方後や成無己が省略した不可篇の経文を、「傷寒論」を冠した1字下げ書式で付記し、行頭から記す注解本の引文と区別する。これら類聚本『傷寒論』の経文・注文を翻宋本と校対したところ、以下の相違や特徴が明らかになった。

類聚本の字句は翻宋本とほとんど一致する。たとえば唐政府本は皇帝・李世民的避諱で洩を洩に改字したが、北宋の校刊では洩を洩に戻している。しかし翻宋本7-19a-10に「能洩奔豚氣」の1例外があり、対応する類聚本44-90a-6の「（傷寒論……）能洩奔豚氣」も同字だった。こうした一致傾向より、類聚本も翻宋本と同じ小字本系と判断できる。

一方、前3世紀の『五十二病方』から北宋までの医薬書は杏人・桃人の薬名ばかりで、杏仁・桃仁は敦煌出土の唐代医書に数例がみえるにすぎなかった。すべてを「仁」で記すのは南宋紹興年間の官版『和剂局方』からみえ、元代から一般化する。そして翻宋本は5-16b-3「桃仁〔二十箇去皮尖及兩人者〕」、10-11a-4「杏仁〔二十四箇湯浸去皮尖及兩人者〕」の2例以外、みな杏仁・桃仁に統一されている。これだけ徹底した統一は南宋政府の校定本だけが可能なので、翻宋本の底本は南宋版系と判断できる。他方、類聚本は43-16b-3「（傷寒論……）杏人〔五十枚去皮尖〕」と44-91b-5「（傷寒論……）加杏人」と記述するので、北宋版系と推定できる。さらに翻宋本9-3a-3「除中〔亦云消中〕」の誤字を、類聚本45-9b-2は「除中〔傷寒論註曰一云消中〕」と正確に記し、類例は他にも多い。

以上ほかより、『医方類聚』が引用する『傷寒論』は北宋小字本系、趙開美『翻刻宋板傷寒論』は南宋小字本系と判断できた。